

英語教育史の研究：過去と現在、現在と未来

久保野 雅史

戦後英語教育の資料を発掘する

2022年度の国内研究休暇では、筑波大学・東京キャンパス（東京教育大学の跡地）に研究室をお借りして、筑波大学附属中学校に残された音声資料等のデジタル化と分析を行っています。デジタル化できたファイルを順番に聞きながら、内容を確認して一覧表の作成を進め、内容の確認についてはNHKテレビ英会話の講師を長年担当された田崎清忠先生（横浜国立大学名誉教授）の指導をときどき仰いでいます。（田崎先生は東京教育大学附属中学校が視聴覚機器を活用した先進的な授業を行っていた時代の中心人物です。このような縁もあり、田崎先生には日本英語教育史学会2022年度全国大会で記念講演をお願いすることもできました。）

デジタル化作業を通して発掘できた「お宝」は、

文部省（当時）とユネスコの委託を受け、東京教育大学の外国語教育研究所（外語研）が実施した小学校英語の実験教育の音声です。「構造言語学とOral Approachに基づいた音声訓練を中心とした授業が行われていた」という記録が残されていますが、それにもかかわらず、現在の小学校教育課程に教科として外国語（英語）を導入する際には、この貴重な研究が顧みられることはありませんでした。その一次資料である授業案・音声にたどり着くことができたのです。

しかし、残されたテープの量が予想以上に多かったこと、また収録内容に関する情報が明らかなでないテープが多いことなどのため、一覧表の完成に何年かかるか見通しが立っていません。停年退職まで残り8年余りとなりましたが、地道に作業を続けていき一步一步完成に近づけて行こうと考えています。



筑波大学



筑波大学附属中学校

未来の研究のために現在の記録を残す

我が家の三男は都立高校の1年生です。公立中学校の3年生だったときに、東京都英語スピーキングテスト（ESAT-J）のプレテストを学校で受験しました。公立中学校の3年生全員の受験が義務づけられていたからです。ESAT-J（イーサット・ジェイと読みます）は、English Speaking Achievement Test for Junior High School Studentsの略称ですが、SAT（サット）という頭字語を耳にすると警察の特殊急襲部隊 Special Assault Teamを想起してしまうので、この悪趣味なネーミングに対して違和感を感じた都民は私だけではないと思います。

このテストは、東京都がベネッセコーポレーションを実施事業者に指定して行う「都内公立中学校3年生のアチーブメントテスト」であり、それを「都立高校入試に活用する」だけであると、というような印象を与える説明がなされています。しかし、検討会議の記録を確認することにより「民間事業者のテストを都立高校入学試験に導入すること」ありきで進められていたことが明らかになっています。都がいかに偽装しようとも、大学入試の場合と同様（あるいはそれ以上）の問題を孕んでいます。しかし、大学入試とは異なり東京に居住する人たち以外は当事者になりません。そこで、東京都民として、公立中学校で子どもが学んだ保護者として、英語教育史の研究者として、都立高入試へのESAT-J導入を阻止するための活動に関わり始めました。

2022年11月27日（日）の午後、中学生・保護者・中学校高校の英語教員・英語教育研究者など多数の反対の声を押し切って、東京都教育委員会

は、ESAT-Jの実施を強行しました。ESAT-Jについては、導入の経緯、テストとしての質、受験者へのフィードバック情報の質と量、都立高校入試に導入することの制度上の破綻、志望校選択への影響、不受験者の扱いなど、深刻な問題が次々と噴出し続けています。

現代進行中の教育政策を正確に記述しておくことは、後世の批判的検証を待つために教育史研究として極めて重要なことです。研究休暇の申請時には想定していなかった活動ではありますが、そういった意味では教育史研究の一部だと入れるかも知れません。

ESAT-Jドキュメント①：試験実施体制の危うさ

試験監督がの大部分がアルバイトで募集されていることが話題になりました。応募条件は「高卒以上」で「近親者が都立高校受験生でない」ことでしたが、自己申告のみで証拠資料の提出は求められません。虚偽申告を見破れる仕組みではないのです。試験当日も身分証明書等の提示は求められませんので、応募した人以外の誰かが「身代わり監督」になっても分かりません。また、監督の研修はインターネットで提示されるスライドと音声視聴して10題の四択テストに回答するものなのですが、本人が本当に研修を受講したのか、誰かに「身代わり受講」を頼んだのか、見破る術もありません。研修を受けていない人が監督として出勤しても、誰もチェックできない体制になっているのです。

試験当日の無断（？）欠席者も少なくなかったようで、試験前夜、場合によっては試験当日の朝に連絡を受けて会場に招集された予備要員も少な

くなかったようです。また、監督業務を担当したアルバイトの大部分には、マニュアルが事前配布されませんでした。そのため「当日初めて目にしたので、読み切る時間を十分に与えられなかった」という不満の声も聞こえてきます。

受験者のスマートフォン回収は、11月になって追加で決定するほどの泥縄で、この業務のために都庁の職員が多数動員されました。配布された封筒に受験番号・氏名を記入してスマートフォンを入れて提出するのですが、受験生本人が「持ってきていない」と事実と反する主張をすれば空の封筒を提出するだけで済みます。結果として、試験の待機時間や試験終了後にスマートフォンを使用している受験生がいた、という目撃証言につながります。

また、前半の受験者が試験を受けている教室と後半の受験者が待機している教室が近接していたために、前半受験者が回答する音声が待機している生徒に聞こえてしまうという事態も複数の会場で起きてしまったようです。仮にそれが少数であったとしても、このような不公平が事実であれば、入学試験に使うことは即刻中止すべきです。

ESAT-J ドキュメント②：学習指導要領を逸脱した出題

試験実施翌日の11月28日（月）に東京都教育委員会HPで問題が公開されるや、大騒ぎになりました。中学校では学習しない内容が問題に含まれていたからです。

Part A（音読問題）のNo. 2に、Do you drink tea? You may have seen that there's a new tea shop next to our school.（後略、下線は筆者）と

いう部分がありました。下線部の＜助動詞＋完了形＞について、高校の学習指導要領には、「高等学校では、必要に応じて、助動詞の過去形、助動詞を含む受け身、助動詞と完了形を用いた過去に関する推測の表現なども扱う。（下線は引用者）」という記述があります。過去の出来事等について「～だったかも知れない」と推し量る表現は中学校では学習しないのです。学習指導要領を逸脱しているので、この問題は「出題ミス」に相当します。どうしてこのような初歩的なミスが起きたのでしょうか。

ESAT-Jの問題形式や内容が、ベネッセが実施しているGTEC Coreとほぼ同じであることは、以前から指摘されてきました。そしてGTEC Coreの受験対象には、中学生だけでなく高校生も含まれます。そのため、高校の学習事項も当然含まれています。都教委は「都教委が事業主体として実施するものであり、業者テストには当たらない。」と保護者・生徒に説明してきました。それなのに、授業主体として確認が甘く、指導要領逸脱という重大な出題ミスを防ぐことができませんでした。この責任は重大で、言い逃れはできません。

メディアからの「指導要領逸脱では？」と指摘に対して、都教委の担当者は、「助動詞＋完了形が出ている教科書もあるので問題ない」と答えたようですが、これは*New Horizon English Course*（東京書籍）1年生に出ている英語の歌 *Take Me Home, Country Roads* の歌詞の一部に、And driving down the road, I get a feeling that I should have been home yesterday.（下線は引用者）とあることを指しているものと思われます。高校入試問題の作成や教科書の執筆に30年以上関わって

きましたので断言できるのですが、歌詞は「授業で学習した範囲」には入りません。また、*New Horizon* では、2年次で助動詞 should が3年次で過去分詞 been が新出単語として登場します。これは「should, been は1年次で学習した単語ではない」という何よりの証拠です。

都教委はさらに「may, have, seen は既習の単語なので意味が分かる。」「文法を理解していなければ答えられない内容ではない」とも答えているようですが、Part A の設問が正しく理解出来ていないのでしょう。設問には「聞いている人に、意味や内容が伝わるように、英文を声に出して読んで下さい。」(下線は引用者)とあります。意味や内容を理解できなければ、相手に伝えることなどできません。既習単語の組み合わせであっても、その文法事項を学んでいなければ may have seen の意味が分からず、文章全体の内容もつかむことはできません。都教委の詭弁が成り立つのならば、高校入試に仮定法過去完了の It could have been better. も出題できることになってしまいます。ミスはミスだと認めない教育行政担当者の姿を見て、中学生たちは何を感じるでしょうか。

不受験者のスコアは偶然に左右される

東京都外に居住している中学生は ESAT-J の受験対象ではありません。そのため、こういった「不受験者」が都立高校を受験する場合には、学力試験の英語の得点が同程度の受験生 10 名以上の平均値に基づいた推定得点が与えられる仕組みになっています。例えば、不受験者と英語の学力試験が同点だった受験生が 10 人いたとして、そのスコアが A (20 点) が 5 人で B (16 点) が 5 人だっ

たします。10 人の平均は 18 点ですから、この不受験者は A と推定されて 20 点が与えられるルールになっています。しかし、同点者が 11 人いて、A が 5 人で B が 6 人になると、平均が 17.8 点なので B の 16 点しか与えられません。本人の英語能力と関係のない偶然によって、与えられる推定点が 4 点も違ってしまいます。

倍率が 2 倍前後の高校では、平均点付近に最も多くの受験生が集中します。そして、ここが合否を分けるラインとなります。ここでの 4 点差は確実に合否に直結します。このような不合理な仕組みが高校入試に導入されようとしているのです。

潜伏先で逮捕されたナチスの残党アイヒマンは、ホロコーストの責任を問われて「上司の命令に従っただけで無罪だ」と答えました。「悪の平庸さ」(ハンナ・アーレント)を持つ者しか、このような言い訳はしません。ところで、先ほど引用した歌詞の should + 完了形は「…すべきだったのに」(過去への後悔・反省)の意です。指導要領逸脱との指摘に対して、無理筋の強弁をした都教育庁の職員は、歌詞の意味が分かっていないのでしょうか。